

平成17年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブ 教育プログラム及び審査結果の概要

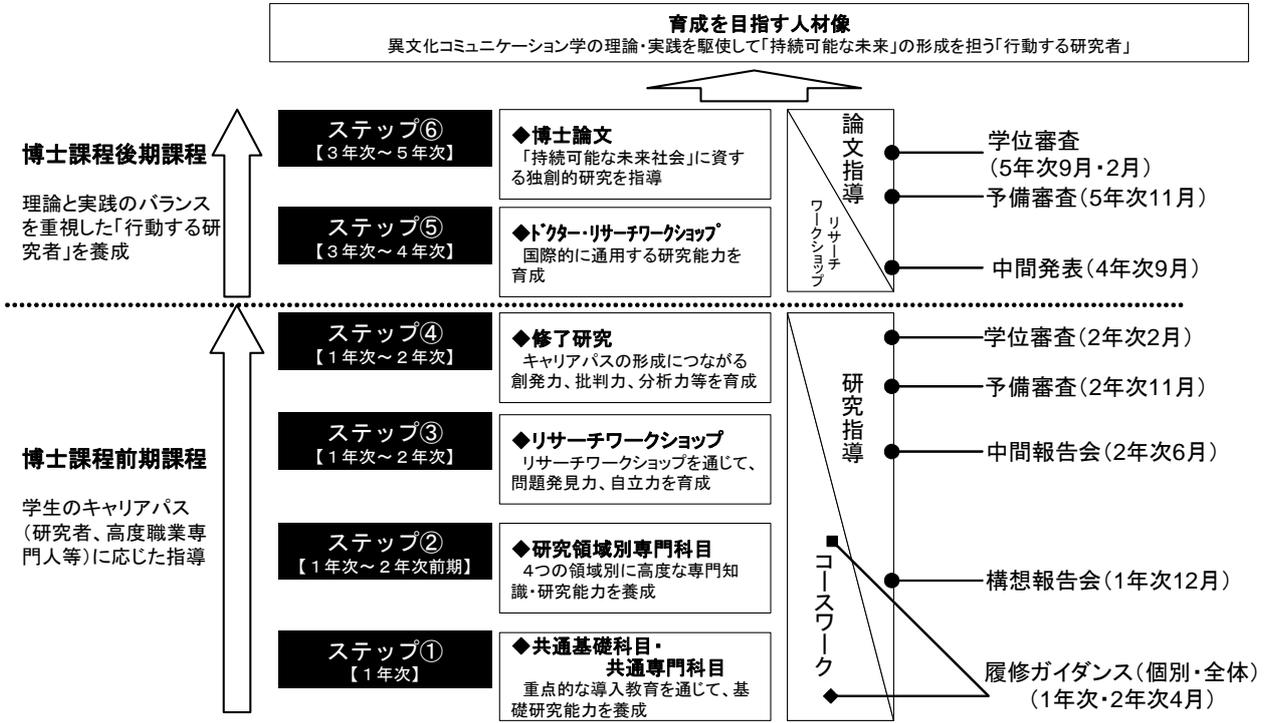
◇「1.申請分野(系)」～「6.履修プロセスの概念図」:大学からの計画調書(平成17年7月現在)を抜粋

機 関 名	立教大学	整理番号	a029
1. 申請分野(系)	人社系		
2. 教育プログラムの名称	持続可能な未来へのリサーチワークショップ (異文化コミュニケーション学構築をめざして)		
3. 関連研究分野(分科) (細目・キーワード)	主なものを左から順番に記入(3つ以内) 複合新領域、社会学		
	主なものを左から順番に記入(5つ以内) (環境と社会、文化とコミュニケーション、多文化共生)		
4. 研究科・専攻名 及び研究科長名 ([]書きで課程区分を記入、 複数の専攻で申請する場合は、 全ての研究科・専攻を記入)	(主たる研究科・専攻名) 異文化コミュニケーション研究科異文化コミュニケーション専攻[博士課程前期課程] 異文化コミュニケーション研究科異文化コミュニケーション専攻[博士課程後期課程]	研究科長(取組代表者)の氏名 鳥飼 玖美子	
	(その他関連する研究科・専攻名)		
5. 本事業の全体像			
5-(1) 本事業の大学全体としての位置付け(教育研究活動の充実を図るための支援・措置について)			
<p>立教大学は2002年、今日的課題に取り組む大学の使命を具現化する取組のひとつとして、既存の学問分野のパラダイムを超える学際性の追求および広く社会に開かれた大学院を実現するために、社会人に対応した昼夜開講制の3つの独立研究科を創設した。異文化コミュニケーション研究科は、そのような立教大学の新たな挑戦の一環として設立され、超領域的な独立研究科として、異文化コミュニケーションという視座から「持続可能な未来社会を担う人材育成」をめざしている。異なった文化を繋ぐコミュニケーションは、人間同士の関係にとどまらず、自然と人の関係性までを包括するものであるという理念のもと、従来の異文化コミュニケーション研究の枠組みを大きく超えた分野横断性を主軸に、実践を理論化し、理論を実践に向けて構築する「臨床の知」を切り拓く教育研究活動を推進している。</p> <p>本学では、こうした活動に呼応して、学際的新領域の創生、国際的に活躍する研究者育成、独創的な研究創造という観点から、異なった研究分野の架橋を軸に理論と実践の有機的結合を求める教育研究活動を推進する支援・措置に力を入れている。「学術推進特別重点資金(立教SFR)」の「院生研究」枠による研究資金の確保、「大学院学会発表奨励金」制度を通じた学外研究活動の推進等を既に行っており、さらに、本事業の目的を達成し、具体的成果を上げるために研究教育補助者を適切に配置することを検討している。</p>			

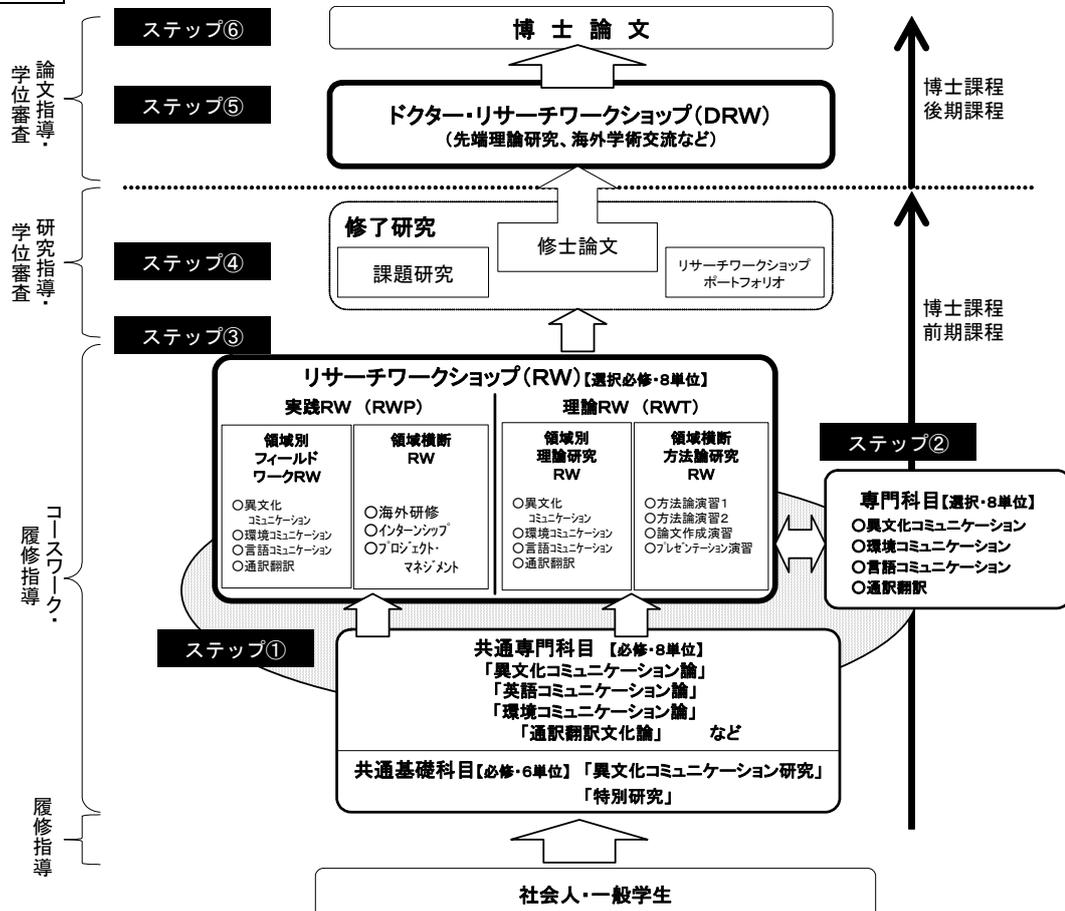
機 関 名	立教大学	整理番号	a029
<p>5-(2) これまでの教育研究活動の状況(現在まで行ってきた教育取組について)</p> <p>新たな異文化コミュニケーション学の構築をめざす本研究科では、異文化、環境、言語、通訳翻訳、の4つのコミュニケーション領域において、それぞれ「リサーチワークショップ(Research Workshops:RW)」科目を展開してきた。また、2003年度からは、4領域の融合研究を可能とする「領域横断リサーチワークショップ」を開始した。</p> <p>①異文化コミュニケーションRW アジアからの研修生と寝食を共にしつつ討論を行い、多文化共生社会について模索する体験型合宿ワークショップを実施してきた。</p> <p>②環境コミュニケーションRW 知床、屋久島、水俣など日本各地において環境問題の具体的課題を体験するフィールドワークを実施してきた。</p> <p>③言語コミュニケーションRW 身体論、記号論の視点から言語教育を考える集中合宿を実施してきた。</p> <p>④通訳翻訳RW 現役通訳者、翻訳者をゲストスピーカーとして招くワークショップを実施してきた。</p> <p>⑤領域横断RW ユネスコ『持続可能な未来のための指導と学習』(2002年)を、環境・通訳翻訳を中心に4領域の協同作業として和訳し、日本語版を立教大学出版会から本年7月に刊行した。</p>			
<p>5-(3) 魅力ある大学院教育への取組・計画(大学院教育の実質化(教育の課程の組織的展開の強化)のための具体的な教育取組及び意欲的・独創的な教育プログラムへの発展的展開のための計画について)</p> <p>大学院教育における新たな異文化コミュニケーション学構築を目標に、本研究科は「リサーチワークショップ(RW)・システム」を核とした組織的な教育課程を展開する。異文化コミュニケーションを広い視野から捉え直し、持続可能な未来社会実現の方途を模索する本研究科では、分野横断的なカリキュラムの提供をめざし、設立時に「リサーチワークショップ」を設置した。理論研究(リサーチ)と体験型ワークショップを組み合わせ「リサーチワークショップ」科目を再編し、「リサーチワークショップ・システム」として体系化する試みが、本取組の骨子である。</p> <p>「実践リサーチワークショップ」(Research Workshops, Practice:RWP) 実践活動の場を通じて研鑽を積む「フィールドワークRW」及び「領域横断RW」の2種類により構成される。「領域横断RW」の具体例として、学会運営、紀要編集、出版企画などを通しプロジェクト運営能力を高める「プロジェクト・マネジメント」、コミュニケーション現場での実務体験から学ぶ「インターンシップ」、海外の大学や研究機関と連携し、海外研修の場を提供する「海外研修」などがあげられる。</p> <p>「理論リサーチワークショップ」(Research Workshops, Theory:RWT) 研究能力の修得とその基礎となる知の内実化を培うことを目的に、基礎理論を集中的に学ぶ「理論研究RW」及び調査分析法・論文作成法などを学ぶ「方法論研究RW」の2種類から構成される。</p> <p>「ドクター・リサーチワークショップ」(Doctoral Research Workshops:DRW) 社会人が70%を占める本研究科では、後期課程へ進む院生にも社会人が多い。多彩な現場に身を置きながら経験知の理論化をはかる努力を支援するために、通常の研究指導に加え、研究科としてのサポート体制を組織化したのが、「ドクター・リサーチワークショップ」である。実践の場から理論へ接近し、実践へ向けた理論の再構成を思考するアカデミック・トレーニングを、先端的理論研究、国内外でのフィールドワーク、国際学会での発表など様々な場において実施することにより、世界的に活躍する資質と能力を備えた研究者を養成する。</p>			

6. 履修プロセスの概念図

■履修指導・研究指導プロセス



■履修プロセス



機 関 名	立教大学	整理番号	a029
<p data-bbox="165 199 588 230">< 審査結果の概要及び採択理由 ></p> <p data-bbox="165 295 1428 470">「魅力ある大学院教育」イニシアティブは、現代社会の新たなニーズに応えられる創造性豊かな若手研究者の養成機能の強化を図るため、大学院における意欲的かつ独創的な研究者養成に関する教育取組に対し重点的な支援を行うことにより、大学院教育の実質化（教育の課程の組織的な展開の強化）を推進することを目的としています。</p> <p data-bbox="189 488 491 519">本事業の趣旨に照らし、</p> <p data-bbox="189 533 1428 613">①大学院教育の実質化のための具体的な教育取組の方策が確立又は今後展開されることが期待できるものとなっているか</p> <p data-bbox="189 629 1225 660">②意欲的・独創的な教育プログラムへの発展的展開のための計画となっているか</p> <p data-bbox="165 678 1428 853">の2つの視点に基づき審査を行った結果、当該教育プログラムに係る所見は、大学院教育の実質化のための各項目の方策が、優れており、期待できるとともに、教育プログラムが事業の趣旨に適合しており、その実現性、一定の成果と今後の展開の面も期待できると判断され、採択となりました。なお、特に優れた点、改善を要する点等については、以下の点があげられます。</p> <p data-bbox="177 916 635 947">〔特に優れた点、改善を要する点等〕</p> <ul data-bbox="172 965 1428 1283" style="list-style-type: none"> <li data-bbox="172 965 1428 1140">・「異文化コミュニケーションの解明に取り組むことのできる人材を養成する」という、目的・役割が明確に焦点化されており、教員組織、FD（教育内容・方法等の組織的な研究・研修）の実施体制もそれに見合った形で整備されており、また教育方法としてリサーチ・ワークショップを採用しようとする試みも評価できる。 <li data-bbox="172 1158 1428 1283">・異文化コミュニケーション学の対象領域は非常に広く、リサーチ・ワークショップの位置づけを含めて教育プログラムの編成内容がやや具体性に欠けているので、プログラムの具体化に向けた計画を早急に立案すべきである。 			